

研究論文

サイバースペースにおける排外的言説の構成 —留学生30万人計画に関する国会質疑の録画を起点として—

山 本 冴 里

キーワード：排外的言説、敵意の言説、サイバースペース、留学生受入れ、国会質疑

要 旨

本研究は、インターネット上の動画共有サービスにおいて、匿名者らのコメントが、留学生受入れを意味づける公的な言説（国会発言）をどのように取り上げ、解釈し、話題を発展させているのかを分析したものである。

その結果、コメントは国会発言の一部を引用しつつ混ぜ返したり、発言の枠組みを再利用したりしていたことが判明した。また、利用されていた言説の種類については、国会での発言がおおむね経済に関する言説（一部は外交戦略・国際貢献に関する言説）であったのに対して、コメントでは、性に関する言説、治安に関する言説、国粋主義の視点からの言説が加えられていたことがわかった。そして、そうした様々な種類の言説は、それぞれ独立して存在するのではなく、国粋主義の視点からの言説を中心に、互いに深く結びついていることも明らかになった。

1. 問題設定

多くの人が自らの意志で、あるいは強制されて国境を超え、広範囲かつ頻繁な移動を経験する時代になった。現代の都会は、結果として、人種・経歴・文化習慣等の点で多様化しつつあると言われるが、しかし、その多様化は常に肯定されているというわけではない。

たとえば日本よりさらに移民受入れや人種の混合が進んだ欧州では、多様性を肯定し積極的に活かすための試みが為されている一方で、排外的な右傾化も進行している。

前者はたとえば欧州評議会による施策群であり、後者としては、2002年のフランス大統領選挙において、極右政党の党首が決選投票まで残ったことや¹、ドイツおよび東欧を中心としたネオナチの浸透などが挙げられる²。

日本には現在、一般に極右政党と見なされるような政党は存在しない。しかしサイバースペース上では日本語で排外的言説を眼にするのも珍しいことではなく³、その多くが差別的・侮蔑的な言説と共に、「日本人」の対立項としての「外国人」へと向けられている。

言語教育を論じる場では、差別に関する問題はタブーとなりがちだ。しかし、Zarate (2001: 153) の言うように、外国人嫌悪や排斥の現実について積極的に認識しようとする態度を養うことが言語教師にとっての高優先事項の一つであるとすれば、言語教育政策を——とりわけ日本語教育政策を考えるにあたっても、この問題を避けて通ってはならない。そしてまずは、問題の現状認識から始めなければならないだろう。

そのための一環として、本稿では、留学生 30 万人計画に関連した 2008 年の国会でのやりとりに応じ、サイバースペース上で寄せられた排外的言説を分析する。排外的言説を誘発したのは国会発言だが、元になった国会発言自体には、取り立てて排外的と見なされ得る表現は含まれていなかった。では、サイバースペース上の匿名者らは、元の国会発言をどのように採り上げたり変化させたりすることで、排外的言説を生み出していたのだろうか。この問いに答え、対抗言説を生む可能性を探ることが本研究の目的である。

2. 排外的言説と行為

次節の分析に先立ち、本稿の議論の枠組みについて説明する。本稿では、排外的言説を、人種や国籍、エスニシティを異にする他集団を排斥しようとする言語表現として捉える。そのような言語表現には「出て行け」「来るな」等の相手に行動/非行動を要求する表現の他に、「日本には日本人だけでいい」などと、特定の場所における自集団の占有を主張するものも含まれる。

排外的言説は、しばしば、差別的・侮蔑的な言説とともに生産されるのだが、この種の言説を一括して、本稿では敵意の言説と呼称する。敵意の言説が持つ問題性についての本稿の立場は、J. バトラー (2004/1997) に依拠し⁴、特に次の 2 点が強調される。見方やあり方は言説によって可能になるために、言説は行為の遂行に強いかわりを

持つということと、特に敵意の言説はJ. L. オースティン (1978/1960) のいう行為遂行的発言の性質を持ちながら、同時に、発語媒介行為の予告という性格をも帯びるということである。

たとえば「出て行け」という排外的言説はそれ自体として、眼にし耳にした人間を傷つける行為（「お前は必要がない」「お前にここにいて欲しくない」という攻撃）となると同時に、将来において傷つける行為の表明（「出て行かせてやるぞ」という予告）の効果をも持つ。そしてそのゆえに一層、敵意の言説は名指される人を傷つける力を行使する。

Matsuda ら (1993) は『Words that wound』という象徴的なタイトルを持つ著書で、アメリカの大学において増殖する敵意の言説について調査・分析しているが、日本で留学生を対象に同種の調査をしたものは、管見の限り見られない。また、日本において排外的言説に関して提起されるのは主に、「表現の自由」の保障と敵意の言説に対する規制という2つの相反する方向性の間で、どこに境界線を引くかという法学的な問題である（たとえば梶原 2007）。それに対して、本稿の分析は、敵意の言説（とりわけ排外的言説）の構成過程を問題とする。敵意の言説に関する次節の分析は、特に3.2.2. 項が中心となる。

3.2.2. 項の分析方法においては、特に Henriques, J. et al. (1984)、Kendall, F. & Wickham, G. (1999) といった、フォーコーに影響を受けた言説分析を参考にした。具体的には、まず分析対象としたテキスト（後述する国会発言およびインターネット上で寄せられたコメント）においてどのような種類の言説が用いられていたのかを検討し、それぞれの種類の言説が互いにどのように関係していたのかを明らかにした。そのうえで、コメントで頻用されていた「俺」という一人称に注目し、「俺」が名指す呼びかけられた主体（対象）に注目することから、遡及的に呼びかけた主体＝「俺」の位置取りを推定した。

3. 分析

3.1. データの概要と特質

インターネット上の動画共有サービス「ニコニコ動画」にアップロードされている、留学生30万人計画に関する国会発言の録画を分析対象とする。本項では「ニコニコ動画」と当該国会発言のそれぞれについて述べた上で、両者が複合した状態についての分析対象としての特質を記述する。

3.1.1. 「ニコニコ動画」とは

「ニコニコ動画」とは、株式会社ニワンゴがインターネット上で提供している動画共有サービスの名称である。その特徴は、動画の任意の箇所に視聴者が手軽にコメントを挿入できることにある。現在「ニコニコ動画」の日本国内での利用時間・利用回数は共に You Tube を上回り⁵、一日当たりの利用者数が 220 万人を超える巨大なメディアである（2009 年 7 月時点）⁶。株式会社ニワンゴの担当者は「ニコニコ動画」が成功した理由を、コメント表示の仕組みが「『感情』の共有を可能にする」からであると分析している⁷。

「ニコニコ動画」では、コメントは入力された時刻とは無関係に、動画の時間軸に沿って再生される。たとえば動画のある場面を見て「面白い」と思い、そのコメントを入力すると、以降に同じ動画が再生された際、「面白い」というコメントが動画に重なった形で表示される。それに対してまた他の誰かが「本当だね」というコメントを挿入すれば、その次の動画再生時には「面白い」と「本当だね」とが並列的に表示されることになる。つまり「非同期に投稿されながら、再生時には動画に同期されるため、『擬似的に皆で同じものを見ている感覚を得ることができる』」のだ⁸。

コメントは、基本的には画面を右から左へと横切る形で 4 秒間表示されるが、静止した形での表示も可能だ。色や大きさも指定できる。4 秒間という時間はすべてのコメントに一定であるため、短いコメントはゆっくりと過ぎていき、長いコメントは速く流れる。

3.1.2. 国会発言

分析対象とする動画には、2008 年 3 月 25 日に参議院文教科学委員会で行なわれた質疑の一部（18 分 4 秒間）が録画されている。民主党の谷岡郁子議員が留学生受入れの支援政策と「留学生 30 万人計画」について質問し、文部科学大臣の渡海紀三朗と、文部科学省高等教育局長の清水潔が回答した。なお、各発言の前には、司会が発言者を指名する。ゆえにやりとりは「谷岡による質問→司会による回答者指名→政府側（渡海大臣あるいは清水局長）が回答→（谷岡が挙手）→司会による谷岡氏名→谷岡による次の質問」という形で繰り返される⁹。質問から回答までを 1 つの連鎖とすると、分析対象とする録画においては 7 つ半の連鎖が見られた。第 1 表は、質問・回答部分のみをまとめたものである。

録画は、谷岡議員の質問 1 に始まり、回答 7 に対する感想（8）で終了している。発話を開始してから話者交代に続く沈黙までを発話時間として計測すると、谷岡議員

の発話時間は計 11 分 58 秒で、政府側 2 者の発話時間は計 5 分 50 秒であった。総計 17 分 48 秒と録画全体の長さ（18 分 4 秒）との差は、司会による発言とその前後の沈黙による。

第 1 表 谷岡議員による質問と政府側の回答

	谷岡郁子議員	政府側回答（S：清水、T：渡海）
1	留学生に対する奨学金はいくらか。貸与か給与か。選抜基準は何か	S：国費・私費それぞれの場合の給付個人額と総額を回答
2	政府は、まず日本国民の教育に対して第一義的責任があるのではないか	T：国民への責任はある。ただ留学生受入れ制度には外交戦略という意味もある
3	留学生支援は日本人学生支援を整備した上で行なうべきではないか	S：日本人学生への奨学金が貸与制であるのは返還を通じて社会への還元意識を養うためでもある
4	30 万人計画を改めてもらえまいか	T：議論しながら進めたい
5	現在の留学生の出身国内訳はどうか	S：地域別・国別の数値を回答
6	中国が突出しているが常にそうか	S：一貫してそうである
7	中国に対する支援が過重ではないか	S：中国人留学生の奨学金受給者数と受給者総数に占める割合を提示
8	私費留学生に対しては学費減免措置もあるが、日本人学生への助成は増えていない（録画打ち切り）	

なお、速記録から書き起こされた国会発言記録は、現在、検索システムを備えたデータベース「国会会議録検索システム」として、国立国会図書館のインターネット・サイト上で公開されている。速記録を会議録へと編集する過程で両院事務局記録部によって行なわれるフィラー等の整理事業については松田ほか（2008）に詳しい。

本稿で引用される国会発言は、3.2.1. 項内のものについては、この会議録からの引用であり、3.2.2. 項のものは、本稿筆者が録画から書き起こした。

3.1.3. 分析対象としての特質

分析対象とする動画は、2008 年 3 月 25 日に参議院文教科学委員会で行なわれた質疑の録画であり、2 分割した状態で、同年 5 月 12 日に、匿名者によって「ニコニコ動画」にアップロードされた。タイトルは「中国人留学生、その真実と虚構（奨学金返還不要?）」1/2 と 2/2 である。1/2 が第 1 表の回答 3 終了時までであり、2/2 は第 1 表の質問 4 に続く谷岡議員の挙手から開始されている。2010 年 3 月 6 日時点での 1/2 と 2/2 それぞれの所要時間と再生数、コメント数、秒あたり表示コメント数平均は第

2 表の通りであって、本稿ではこの時点でのデータを分析対象とした。

第 2 表 所要時間・再生数・コメント数・表示コメント数平均（2010 年 3 月 6 日現在）

	所要時間	再生数	コメント数	表示コメント数平均
1/2	8 分 10 秒	25,867 回	9,124 → 最新 1000 件表示	約 8,2
2/2	9 分 54 秒	6,014 回	2,634 → 最新 1000 件表示	約 6,7
計	18 分 4 秒	31,881 回	11,560 → 最新 2000 件表示	約 7,4（平均）

「ニコニコ動画」では、コメントは 1 動画につき最新の 1000 件しか保存されない。そこで、分析対象動画において表示されるコメントは、1/2 と 2/2 に各 1000 件（計 2000 件）である。1 つのコメントの表示時間は 4 秒間であることから、総計 18 分 4 秒間の当該動画において、視聴者は平均して 1 秒あたり約 7.4 件のコメントを眼にすることになる。

言説分析の対象として、このコメント群に特徴的であるのは、ほぼ完全な匿名性が維持されている点である¹⁰。コメントには名前が無い。したがって人々は、挿入したコメントに対して現実的な社会における地位や立場からの責任を引き受ける必要が無い。その無名のコメント群は動画内の谷岡議員や渡海大臣、清水局長の発言に反応し、あるいは他の視聴者に呼びかけ、コメント同士で応じあう。動画にアクセスした視聴者が眼にし、耳にするのは、挿入されたコメントの文字と動画の音声、映像の複合体である。以下では 3 者をそれぞれコメント・発言・映像と呼び、絡み合う言説のその総体をテキストと呼称する。

3.2. 分析

3.2.1. 国会質疑

国会質疑の中で、留学生はどのような存在として構成されていたのか。まずは、発端となった谷岡議員の発言を見る。

谷岡議員：三百億円以上の給付金が留学生に使われております。(A) 彼らの親は日本の納税者ではございません。そして、この多くの学生たちはやがて卒業をして、そして自らの国へ帰ります。つまり、(B) 日本の国に税金を納めるわけでもございませんし、(C) 日本の国の活力あるいは経済的な競争力のために頑張るというわけでもございません。(第 1 表の 2 に相当する発言部分)

谷岡議員：三十万人の留学生への増員ということは言語道断な話だと実は思っております。(中略) 一人の留学生を受け入れるということは、職員も教員も大幅に手間暇を取られます。(中略) (D) 留学生、一人一人に対して三倍から四倍手間暇、時間が掛かると言われている者たちを、これ(引用者注：職員や教員)が面倒を見ているわけです。(第1表の4に相当する発言部分)

谷岡発言によると、留学生は (A) 日本の納税者たる親を持つわけでもなく、やがて卒業して自分の国へ帰るために、(B) 日本の国に税金を納めるわけでもなく、(C) 日本の活力あるいは経済的な競争力のために頑張るというわけでもない。その上 (D) 三倍から四倍、手間暇、時間がかかるにも関わらず、三百億円以上という高額の奨学金を消費する者として位置づけられている。一方、対比的な存在として論じられるのが、日本人学生である。以下の引用部分において (a)・(d) は留学生についての (C) に、(b) は (B) に、(d) は (A) にそれぞれ対応する。

谷岡議員：日本の学生たちというのは (中略) (a) 国家の運営を担う者であり、同時に (b) 将来の納税者である、また、かつ年金の給付者になる人たちであるというふうに考えます。同時に、(c) 日本の学生たちの保護者というものはおおむね納税者であって、そして (d) 日本の教育をこれまでも支えてきた人々である、また支え続けている人々であるということが言えると思います。(第1表の1に相当する発言部分)

日本人学生と留学生に対する奨学制度の違いが対比された後、日本人学生＝自分の子、留学生＝隣の子とした家族関係のアナロジーの中で違和感が説明される。

谷岡議員：日本人の学生に対してはローンという形の貸与のみの奨学制度になっていると。ところが、取り切りのお金をもらっている人たちがいる。それは留学生でございます。(第1表の1に相当する発言部分)

谷岡議員：隣の子の学費を出して自分の子の学費を出さないということに等しいことが行われている (後略) (第1表の3に相当する発言部分)

日本人学生と留学生との対比の中で、留学生は「本来」日本人学生に与えられるべ

き費用や教育、サービスを「取」っていく者として、反対に日本人学生は「留学生に多くを取られる」「犠牲」者として位置づけられていく。

谷岡議員：言わば日本人学生をほうり出してでもそれ（引用者注：留学生への対応）をやらなければいけないという事情の中で、本来ならば日本人学生が教員から受ける指導であり、事務職の者から受けるサービスであるものを犠牲にしながら、現場はそれに対応してきたということであります。（中略）本来、日本の大学は日本人学生たちを中心とした、基本的には日本学生のためにあるものだというふうに私は考えておりますけれども、お金も掛かる、そして教育、サービス、そういうものもやはり留学生に多くを取られるということが現場においては日本人学生の犠牲の下になされている（第1表の4に相当する発言部分）

付言すると、前出の家族関係のアナロジーにおいて、留学生が「近所の子」ではなく「隣の子」とされていることは興味深い。なぜなら、谷岡は第1表の6・7に相当する質問で、中国に的を絞っていくからである。第1表の7の質問（部分）に相当する下の引用箇所においては「留学生」≡「中国人」であり、中国はすでに経済的繁栄を享受し始めているために、彼らに対する「恩恵」は「過重」とされ、継続の必要が疑問視されている。

谷岡議員：GDPで日本に追いつこうとしている中国、一億人の富裕層が現れてきていると言われている中国、そういう中国の中では既に文化大革命の傷跡というものもいえまして、中国独自の大学教育というものも現在はできるようになっております。その上で、なおこの文化大革命後以来のこの過重なとも言えそうな中国人に対する、そして留学生に対する日本の政府の恩恵というものは今後にも必要なのであるでしょうか。（第1表の7に相当する発言部分）

以上の谷岡発言の枠組みとなっているのは、費用負担者（納税者）が受益者（奨学金受給者、教育・サービスを受ける者）となるべきだという考え方である。そこで、将来に対しては、見返り（税の納付・日本の活力や経済的競争力となること・教育を支えること）を期待して、その期待と引き換えに資源（奨学金・教育・サービス）を投資するのが当然だという論理構成がなされている。

このような考え方は、経済に関する言説に特徴的なものである。谷岡発言は、基本

的には経済に関する言説で構成されている。経済に関する言説を用いることで、前提や期待、正統な実践が描かれる（C. ウィリッグ, 2003/2001, p.147）。正統な実践とは、上掲のような交換行為に参加し、互恵的な社会的布置の一部となることであって、「恩恵」（税金等）をもたらさないにもかかわらず「恩恵」（奨学金等）を奪う行為は不当とされる。だからこそ、谷岡によれば、それは「本来ならば」あってはならない姿なのである。

「恩恵」を「取られる」側の日本人学生は、「犠牲」者として表象された。対比されているのは、「取」っていく者としての留学生である。明言こそされていないものの、留学生＝収奪者としてのイメージが構成されている。

対する政府側は、下の引用に見られるように、谷岡発言とは「違った側面」・異なる「視点」を導入し、経済に関する言説は利用しなかった。言うなれば、彼らが谷岡と同じ土俵に立って現行制度ないし 30 万人計画の当否を論じた場面は無かった。政府側発言によれば、留学生受入れは「外交戦略」「国際貢献」として捉えられるべきものなのだ。

渡海文部科学大臣：留学生の制度というのは、やっぱりある意味違った側面を持っているというのが私の理解でございます。ODA と言うとちょっと言い過ぎかもしれませんが、やっぱり外交戦略としての意味もあるわけでございますし、また日本が国際的にいろんな国々と関係を築いていく上で知的貢献をしていく、そういった意味もあるわけございまして、一概に今委員（引用者注：谷岡議員）がおっしゃったような視点だけで物事を決めていくというのはなかなか難しいというふうに考えます。（第 1 表の 2 に相当する発言部分）

清水局長：留学生の施策は我が国の置かれた環境と高等教育の在り方、そして国際的な貢献という部分で基本的にやはり進めていく、それが一種の呼び水になる（後略）（第 1 表の 3 に相当する発言部分）

3.2.2. コメントにおける言説資源の利用と特徴

では、「ニコニコ動画」上のコメント群は、前項にまとめた国会発言をどのように採り上げ、変化させ、排外的言説を生み出していたのだろうか。また、そこでは、どのような種類の言説が見られたのか。

本項では、3.2.2.1. で、コメントによる発言の再利用について述べる。3.2.2.2. では、

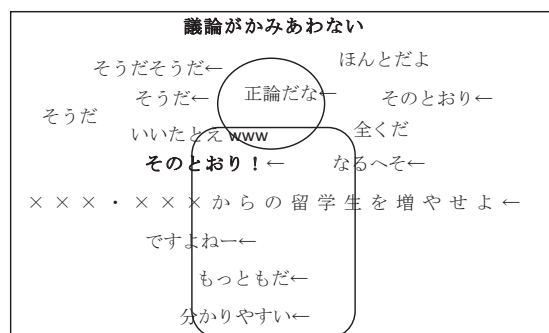
コメントで利用されている言説の種類を検討する。そして3.2.2.3.で、コメントにおけるグルーピングと主体の位置付けについて分析する。

なお、本項で引用するコメントは多数の差別的・侮蔑的言辞を含むが、コメントは分析の対象とする一次資料であるため、特定のエスニックグループを指す表現および「『国名』+人」を除き、伏字にはしていない¹¹。特定のエスニックグループを指す表現は、どのグループであるか、またその表現の拍数に関わらず「×××」と示し、「国名」+人という表現ないし指示対象グループの国籍を特定できる表現については、日本人を除き「×××人」と表示した。

3.2.2.1. コメントによる発言の再利用

分析対象動画におけるコメント群は、動画内の谷岡議員や渡海大臣、清水局長の発言に反応し、あるいは他の視聴者に呼びかけ、コメント同士で応じあう。本項では谷岡発言を例に、コメントが発言を一種の資源として再利用する様子を示すが、その前段階として、「ニコニコ動画」のイメージ図を付しておく（第1図）。

第1図は、谷岡議員が留学生を「隣の子」に、日本人学生を「自分の子」に喩えた既出の発言（第1表の3部分）を終えた時点、すなわち「隣の子の学費を出して自分の子の学費を出さないということに等しいことが行われているのではないかとやはり思ってしまうわけでございます」の「す」を言い終えた時点での動画画面を図化したものである。谷岡議員は画面中心部に位置し、計15のコメントが見える。



第1図 動画画面例（谷岡発言の比喩終了時におけるコメントの状態）

第1図内で末尾に矢印を付したコメントは、画面右から左へと移動中のものである。

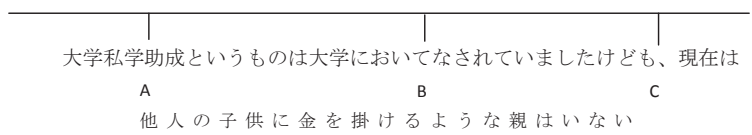
色の変えてあったコメントは、第1図内では太字にした。また、画面上部の3コメントは、「議論がかみあわない」が静止表示であったために、一時的に重なって表示されていたが、第1図内では位置を移動させて読みやすくした。なお、中央部の長いコメントは、この前の部分に「だったら×××とか」が付く。コメント全体としては「だったら×××とか×××・×××からの留学生を増やせよ」というもので、この直前にあたる渡海文部大臣の発言（外交戦略・国際貢献として留学生を受入れるという趣旨。3.2.1. 末に前掲）に反応して、国際貢献というならば現行とは異なる地域からの留学生受入れを増やせ、と要求している。

この画面でのコメントは、発言に対する評価（「正論だな」等）や、発言への同意（「そうそうだ」等）、動画上の状況に対する解説に相当するもの（「議論がかみあわない」）および発言を受けての提案（「×××とか×××・×××からの留学生を増やせよ」）であると解釈できるが、動画全体においては、加えて発言者への質問形式をとった非難（「あなたはどこに天下るんですか？」）や、他の視聴者へ行動を呼びかけるもの（「もう育英会の奨学金みんな返済ボイコットしようぜ」「ワープアー揆おこそうよ」）など、さまざまな種類のコメントが見られた。

また、第1図のコメントは直前の発言に反応したものばかりであるが、他方では、時間を置いて動画上の発言を引用したり変奏したりしているコメントも見られ、そこでは、発言は一種の再利用可能な資源として機能していた。

以下では、コメントによる発言の再利用について報告する。2種の再利用がある。一つは発言中の表現を取り上げて、それを同様の、あるいは異なる文脈に置きなおす。もう一つは日本人学生と外国人学生の比較という発言の枠組み自体を再利用するというタイプのものである。まず、表現を再利用した例を2つ挙げる。

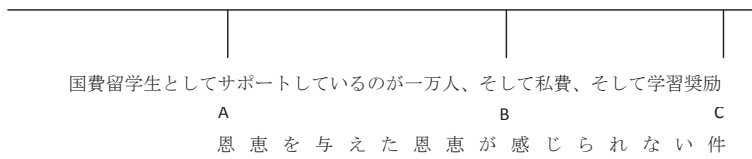
表現の再利用例1：谷岡は第1表の8に相当する部分で、私費留学生に対しては学費減免措置があるにも関わらず日本人学生に対する助成は増えていないことを主張する。その一部に「一時は30パーセントぐらいまで大学私学助成というのは大学においてなされていましたが今は10パーセント内外というようなことに収まっております」という発言がある。この音声に重なって「他人の子供に金を掛けるような親はいない」というコメントが流れる。Aはコメント開始時点であり、Bはコメントの末尾「い」が画面に現れた時点である。



コメントは画面右から左に向かって流れ、Cの時点で完全に消える。第1表の3（谷岡発言）以降この時点までの約14分半の間、学生と政府との関係の子供と親との関係になぞらえた発言は見られない。そこで、この発言は、第1表の3時点にある谷岡発言（3.2.1.に前掲）を参照し再利用したものと考えられる。それでは、このコメントにおける谷岡発言の再利用は、どのような意味を持つものなのか。

引用元の谷岡発言を参照すると、「他人の子供」は留学生に、「親」は政府に相当する。ゆえに「他人の子供に金を掛けるような親はいない」というコメントは、「留学生に多額の奨学金を与えるような政府はない/いない」という政府批判として読み取れる。さらにこのコメントが学生一般に対する大学私学助成についての発言にかぶせられていることを考慮すると、問題となっているのは、留学生に対する奨学金の絶対的な額というよりもむしろ、日本人学生への支援と比較した上で感じられる相対的な多さなのだということが推定される。ゆえにこのコメントは、大学私学助成の少なさ、すなわち「自分の子供」（日本人学生）に対する財政的支援の乏しさに対する抗議としての意味も持つことになる。

表現の再利用例2：同様に、第1表の7に相当する部分において、奨学金制度に疑義を呈した「過重な（中略）日本政府の恩恵」という谷岡発言（3.2.1.項に前掲）も、時間を置いて再利用された。以下は、谷岡の当該発言から約20秒が経過し、政府側担当者の清水局長が留学生総数と奨学金・学習奨励費支給者数の割合を説明している発言部分に挿入されたコメントである。谷岡発言にあった「恩恵」を再利用し、混ぜ返すようにして「恩恵を与えた恩恵を感じられない件」としている。多数（数値は清水局長が説明中である）の留学生に「恩恵を与えた」にも関わらず、それによって得られたもの（「恩恵」）が無い、という不満だ。Aはコメントの開始時点であり、Bは同コメントの末尾「件」が画面に現れた時点である。コメントは流れ、Cの時点で完全に消える。



続いて、発言の一部に相当する表現ではなく、発言の枠組みを再利用した例を見ていく。3.2.1. で分析したように、谷岡は頻繁に日本人学生と留学生を比較し、両者に対する奨学制度の違いを際立たせる手法で論理構築を行っていた。その手法は、コメントにおいてもしばしば踏襲されている。第3表内の例1－3は1コメント内で明確に比較を行なった例であるが、例4、5のように、どちらか片方について比較的極端な例を提示することで、結果として比較の効果を得ているコメントも見られた。

第3表 日本人学生と留学生を対比させたコメント例

番号	コメント
例1	つまり、×××人は日本から金もらって勉強して豪遊して帰る。日本人は必死に働いて勉強出来ずに死ぬ。これが国の決めた制度と
例2	日本人が馬鹿高い学費払って留学生はタダかよ
例3	貧乏日本人院生の傍らで、うはうはが留学生という構図だからな
例4	母子家庭で月収12万なのに大学で奨学金貰えなかった、日本人の俺……
例5	うちの大学に来てた×××人・×××人ってみんな金持ちの子ばっかだったけどね

3.2.2.2. 利用されている言説の種類

ここでは、コメントにおける言説の種類について分析する。国会では谷岡発言が主に経済に関する言説を用い、政府側2者が「外交戦略」「国際貢献」といった文脈を提出していた。コメントでは、それに加えて、新たに治安に関する言説・性に関する言説・国粋主義の視点による言説が追加されていた（第4表）。

第4表 コメントにおける言説の種類と例

言説の種類	番号	コメント
経済に関する言説	例6	恩恵を与えた恩恵を感じられない件
	例7	16年間自国の金で勉強し、5年間日本の大学院で勉強し、そして日本で就職し、日本は丸儲けでは？
外交戦略・国際貢献の文脈に置かれた言説	例8	外交戦略の犠牲になれと……
	例9	戦略的互惠関係とか名称だけはカッコつけてるけど、従来通りの土下座売国じゃねえか
治安に関する言説	例10	留学生に金を恵んでやらんと人殺しするからね www ¹²
	例11	日本人学生の俺が生活厳しいのに何で犯罪者予備軍に金まわすの？
性に関する言説	例12	×××人のキレイなムチムチだけ全額補助すべき！
	例13	このハゲ絶対若い×××人とセックスしてるぜ
国粋主義の視点による言説	例14	税金の無駄というより、凄い反日と×××優遇だな
	例15	親日の×××人育てるのは大事だよ

まず、例 6 のコメントは、すでに 3.2.2.1. でも取り上げたが、これは交換行為を前提としている点で、経済に関する言説である。同じく経済に関する言説中で挙げた例 7「16 年間自国の金で勉強し、5 年間日本の大学院で勉強し、そして日本で就職し、日本は丸儲けでは？」は、注目に値する。このコメントは、留学生への支援は損失ではなく経済的利益となるという趣旨であって、谷岡発言と同じく経済に関する言説を使用しながら、なおかつ反論し得ているからである。

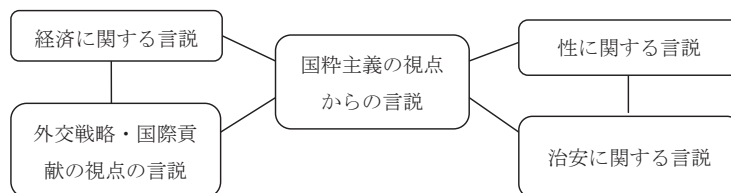
外交戦略・国際貢献の文脈に置かれた言説例には、奨学金支給が外交戦略・国際貢献として成り立っていないという趣旨のコメントが複数見られた（例 8・9）。

治安に関する言説では、「人殺し」「犯罪」といった言葉が多用され（例 10・11）、本稿での引用は避けるが、他に、2008 年当時に特定のエスニックグループと関連があるとされた、時事的な話題性を持った出来事への言及も複数見られた。

性に関する言説例では、その多くが女性あるいは年配者の性を貶めるものであった。また、特定のエスニックグループに結びついた性的表現も見られた（例 12・13）。

国粋主義の視点による言説例では、留学生に関して反日－親日という評価軸が見られる（例 14・15）。留学生ではなく、答弁中の政府側担当者に対するコメントにあっても、しばしば「愛国」「売国奴」「血税」が使用され、「大本営」「敵国」「非国民」「国賊」といった用語によって戦時体制を仄めかす形での敵対意識も見られた。

ところで、コメントの言説群は、国粋主義の視点からの言説を中心に、しばしば互いに結びついていたことに留意したい（第 2 図）。



第 2 図 性質を異にする言説間の結びつき

国粋主義の視点からの言説と、性に関する言説が結びついた例には、例 16「日本政府国犯されすぎだ」、例 17「日本の母は息子に×××の嫁は拒否します」がある。

性に関する言説は、治安に関する言説にも強く結びついていた。そのようなコメント例としては、例 18「留学生こないだ風俗店経営で逮捕されてた」があった。さらに、治安に関する言説が性にも特定の国籍を持った集団にも結び付けられた例として、例

19「×××人とかレイプ犯罪者ばかりだろ」が挙げられる。

また、国粋主義の視点による言説と、経済に関する言説が結びついた例には、例20「奨学金無料にするかわりに、親日になるということをおしつけろ」が見られる。このコメントは価値交換を前提としている点で経済に関する言説であり、反日－親日という評価軸を持ち込んでいる点で国粋主義の視点を持っている。

経済に関する言説は、外交戦略・国際貢献の文脈での言説にも結びつく。そのようなコメント例としては、例21「外交戦略があるなら、その効果を報告しろよ」が挙げられる。

なお、国粋主義の視点による言説例中に挙げた、例15「親日の×××人育てるのは大事だよ」というコメントは、外交戦略の文脈にあるものとしても解釈できる。しかし国粋主義の視点を持った言説で、なおかつ外交戦略として留学生受入れに積極的であると解釈できるコメントは、全2000件の中で、同コメントしかなかった。より頻繁には、国粋主義の視点による言説例は他者（留学生）に対する否定の正当化と国粋主義に、そして「入れるな」「来るな」「出せ」「帰れ」といった排外主義へと結びつく。そのようなコメント例を第5表に挙げる。

第5表 排外主義的なコメント例

番号	コメント	番号	コメント
例22	半日 ×××に金出すなよ、てか受け入れるな	例25	民族浄化
例23	留学生いらねえよ	例26	いらねー 日本には日本人だけでいい
例24	もう鎖国したい	例27	凶悪×××人入れるな

そして供給されるのは、例28「このままだとマジで×××に喰われるぞ」、例29「国家転覆」という恐怖感・危機感である。

3.2.2.3. コメントにおけるグルーピングと主体の位置付け

繰り返し述べているように、コメントには名前が無い。しかしコメントが行なうグルーピングを分析することで、コメントを行なう主体の位置取りを特定することができる。

J. バトラー（2004/1997）は、敵意の言説は聞き手に対して働く（発話媒介行為）だけでなく、そのように名指しされる人を社会的に構築するのに寄与している、と幾

度も強調している。だが、「言説は対象だけでなく主体も構成し、結果として意味のネットワークの中で（他者を位置づけると同様に）話者が取りうる位置」が特定される（C. ウィリッグ, 2003/2001: 151-152）という考えに基づくと、名指しの行為は、呼びかけられた主体（対象）ばかりでなく、呼びかけた主体の位置取りをも遡及的に特定させるものだと言える。

もちろん、そこでの主体の位置取りとは、現実社会における地位や立場、姓名を意味してはいない。ここでは、現実社会におけるそれではなく、あくまでもテキスト中のコメントにおいて、どのような主体が構成されているのかを検討する。

分析対象動画において、コメントで一人称が使われる際、それは例外なく「俺」であった。この「俺」とは、どのような主体なのか。すでに 3.2.2.1. の例 1-5 で「俺達日本人学生」と「非日本人学生＝留学生」との対置を見たが、コメントに見られる様々なグルーピングからは、この他にも「俺（達）」対「非俺（達）」という複数の対立軸が見える。以下では「俺（達）」が呼びかける「非俺（達）」が誰であるのかを見ることから、遡及的に「俺（達）」を特定したい¹³。

まず「俺達日本人」対「非日本人」という対立がある（第 6 表, 例 30-33）。この対立軸には、下位分類として「日本人」と「非日本人」とを国籍の有無で判別していると思われるもの（例 30）と、日本国籍であるだろう者に対して、その立ち位置のために「日本の側ではない」「非国民」という非難が行なわれているもの（例 31・33）とが見られた。後者にはしばしば「売国」という言葉が被せられ、「愛国」と対比された。（例 32）

「俺達若者」対「非若者」という対立軸も見られる（第 6 表, 例 34・35）。この対立軸において、「非若者」は壮年・中年というよりも老年を意味し、答弁中の政府側担当者を指していると考えられる。年配者の身体的条件を貶める表現は、例 13 にも既出である。

さらに、「俺達貧乏人」対「非貧乏人」という対立軸も存在した（第 6 表, 例 36・37）。この対立軸において、「非貧乏人」は上掲の「非若者」に重なり合う。

第 6 表 「俺（達）」対「非俺（達）」という対立軸

番号	コメント	番号	コメント
例 30	俺達日本人に謝れ	例 34	アホな古臭い考えの老人達を排除しないと変わらない
例 31	このじじい（引用者注：答弁中の政府側担当者だと推定される）は「日本の側」ではないってことだな	例 35	ハゲじじい、キエロ！

例 32	売国奴どもを一掃しないと、この国は終わる⇔（引用者注：別コメントとして）愛国日本人が差別迫害底辺って、国としておかしい）	例 36	結局おまいら（引用者注：答弁中の政府側担当者だと推定される）は金に困らないくせに
例 33	非国民	例 37	こいつら官僚には金の感覚が欠如している

以上の対立軸において、「俺（達）」は高い同質性を要求する。特に「日本人」対「非日本人」の対立軸において、それは強烈な印象を残す。「俺（達）」性は一種の全称命題であり、差異は認められない。差異の存在は、そのまま「俺達」からの排斥（例：「日本の側」ではない者＝「非国民」）を意味していた。

「俺達」は「非俺達」を排斥し、沈黙を強いようとする。それは前項で検討した「出て行け」「いらない」等を意味する表現とともに「非俺達」に対してしばしば投げかけられる「キエロ！」（例 35）、そして答弁中の政府側担当者の発言にしばしば被せられていた、例 38「おまえもう黙れよ」・例 39「黙れ！」などのコメントによって明らかである。

4. 結論に代えて——対抗言説の可能性

本研究は、インターネット上の動画サービスにアップロードされている国会質疑の録画を分析対象として、留学生を意味づける公的な言説を、匿名者らのコメントがどのように採り上げたり変化させたりするのかを分析した。

もっとも、本研究で扱うことのできたデータは「留学生 30 万人政策」に関する 20 分足らずの国会でのやりとりと、それに触発されたサイバースペース上でのコメントにすぎない。そこで、今後、より広範囲のデータを分析することによって、本研究での考察を検証していくこととしたいが、そのためにも、最後に、本研究で明らかになった事柄をまとめておく。

まず、サイバースペース上でのコメント群は国会発言の表現を繰り返したり、その枠組みを再利用したりしていたことが判明した。また、国会質疑の時点では、経済に関する言説と、外交戦略・国際貢献の視点からの言説が提出されていたのに対して、サイバースペース上では、新たに治安に関する言説・性に関する言説・国粋主義に関する言説が追加されていた。なおかつ、それらの言説は互いに独立して存在するのではなく、国粋主義の視点からの言説を中心に、互いに深く関連していることが明らかになった。そして国粋主義の視点からの言説は容易に国粋主義に、さらには排外主義

へと結びついていた。

また、コメントにおけるグルーピングから、遡及的にコメントを行なう主体の位置取りを分析したところ、そこでは「非俺達」に対して排斥的な「俺達」（日本人・若者・経済的弱者）の構成が推定された。

はじめに述べた通り、本稿筆者は、排外的言説を理解してこそ対抗言説の可能性が開けると信じている。では、本研究において見えてきた対抗言説の可能性とはいかなるものか。

二種の可能性を提案したい。一つは、土台となる言説と同じ枠組みに則って、ひとつひとつ反論していくことである。たとえば、3.2.2.2. で採り上げた「16年間自国の金で勉強し、5年間日本の大学院で勉強し、そして日本で就職し、日本は丸儲けでは？」というコメント（例7）がこれに相当する。谷岡発言の枠組み（経済に関する言説）を使い、なおかつ反論し得た例である。実証による数値を援用すれば¹⁴、より説得力を持って、土台となる言説——ここでは経済の言説——の枠組みにそって反論していくことができるだろう。国家として留学生受入れの施策を打ち出し、税金を用いて実施している以上、何らかの形でその「効果」を検証し提示すること、そして排外的な言説に反論することは、行政の当然の責務であると考ええる。先駆的な試みとしては佐藤（2010）の『日本の留学生政策の評価—人材養成、友好促進、経済効果の観点から』があるが、さらなる調査研究、情報公開が望まれよう¹⁵。

だが、それだけでは問題も残る。留学生受入れに関する議論を、「効果」だけで語って良いのか、という問題だ。そこには、実践に裏打ちされた哲学が足りない。政府側発言には、留学生受入れを「外交戦略」「国際貢献」として捉えるものも見られたが、こうしたキャッチフレーズ的は、人の心を納得させるには到底足りない。留学生政策と、そこに深く関わる日本語教育政策のための思想・哲学を持つこと——それが第二の可能性であり、留学生教育・日本語教育に関わる知識人の責務であり、それは第一の可能性よりもさらに困難な課題ながら、今後のこの社会をより多様な価値観によって支えていくために、必要な行為だと思われる。

注

- 1 反EUや反移民政策を持論とする、国民戦線（Front national）の党首 Jean-Marie Le Pen である。
- 2 近年の欧州における極右勢力の伸長について日本語で読める文献としては、J. Y.

- カミュ (2003/2002) の分析が詳しい。
- 3 仮想的空間としての意味合いを強調するために「インターネット上」ではなく「サイバースペース上」という語を使用した。また、その際、コメントを書き込む人間が地球上のどこにいるかは問題にならないので、「日本で」ではなく「日本語で」とした。
 - 4 J. バトラー (2004/1997) では「憎悪発言」という訳語が使用されている。本稿における「憎悪言説」もこの意であるが、本稿において「発言」は分析対象の国会発言を指すものであって紛らわしくなるため、「敵意の言説」とした。
 - 5 日経産業新聞 (2007 年 9 月 25 日, 2 面)
 - 6 『日経 PC ビギナーズ』の 2009 年 4 月号記事『『ニコニコ動画』再生中にコメントが飛び交う動画サービス』より。
 - 7 日経 BP 社によるインターネット記事『『感情の共有』、『負荷との戦い』ーニコニコ動画の技術』より。
 - 8 注 (6) に同じ。
 - 9 質問の形をとった意見や批判と見られる発言もあるが、本稿の用語は質問に統一した。
 - 10 厳密には、IP アドレスからコメント投稿者を突き止めることは不可能ではないが、現実的にそれが行われる可能性は非常に低い。
 - 11 学問的分析対象として差別的・侮蔑的表現に言及する本稿も、その意図に反して、その種の表現の流通に加担してしまうことは事実である。J. バトラー (2004/1997:23) は、これを「不適切な言葉づかいについて議論する法的発言の文脈で、不適切な言葉づかいがつねに増殖しているのである。(中略) 憎悪発言を批判し法的に禁止しようとする言説それ自体も、憎悪発言のパフォーマンスの再演となる」とまとめている。
 - 12 このコメント中に見られる w は「笑い」を意味する記号である。本稿筆者が設定したものではなく、サイバースペースで頻繁に用いられている。
 - 13 本文中に挙げた対立軸の他に、「俺」という一人称からは「俺達男」対「非男」という対立軸も考えられる。しかし、分析対象としたテキスト内には、性的に女性を貶める表現が見られた (3.2.2.2. に前掲) ものの、排除の表現とは結び付けられてはいなかったために、本項では採りあげなかった。
 - 14 本文中に後出のように、たとえば、佐藤 (2010) は 1950 年代以降の留学生受入れによる経済効果について実証した。

15 なお、「効果」を何に求めるのか、という点の議論は現在あまりなされていない。「効果」とは、留学生の能力向上であるかもしれないし、対日好感の増大かもしれないし、あるいは経済的な取引の増大なのかもしれない。あるいはその全てと捉えることもできるだろう。本文中に述べた調査研究と情報公開は、多方面からの実施が望まれる。

文献

- 梶原健佑 (2007) 「ヘイト・スピーチと『表現』の境界」『九大法学』94号、九州大学、49-115.
- 「『感情の共有』、『負荷との戦い』ーニコニコ動画の技術」日経BP社
<<http://itpro.nikkeibp.co.jp/article/COLUMN/20071211/289262/>> (2010年3月3日検索)
- 「『ニコニコ動画』再生中にコメントが飛び交う動画サービス」(2009年10月)『日経PCビギナーズ』日経BP社
- 佐藤由利子 (2010) 『日本の留学生政策の評価ー人材養成、友好促進、経済効果の観点から』東信堂
- 松田謙次郎・薄井良子・南部智史・岡田裕子 (2008) 「国会会議録はどれほど発言に忠実か?ー整文の実態を探るー」松田謙二郎 (編) 『国会会議録を使った日本語研究』、ひつじ書房、pp.33-62.
- Austin, J.L. (1960) *How to Do Things with Words*, Oxford: Oxford University Press. (J. L. オースティン著 坂本百大訳 (1978) 『言語と行為』大修館書店)
- Butler, J. (1997) *Excitable Speech: A Politics of the Performative*, New York & London: Routledge. (J. バトラー著 竹村和子訳 (2004) 『触発する言葉 言語・権力・行為体』岩波書店)
- Camus, J.Y. (2002) Du fascisme au national-populisme: Métamorphoses de l'extrême droite en Europe, *Le Monde diplomatique* (J. Y. カミュ著 富田愉美訳 (2003) 「ファシズムからナショナル・ポピュリズムへ」『力の論理を超えてール・モンド・ディプロマティーク 1998-2002』, NTT出版, pp.174-185.)
- Henriques, J., Hollway, W., Urwin, C., Venn, C. & Walkerdine, V. (1984) *Changing the Subject: Psychology, Social Regulation and Subjectivity*. London: Methuen.
- Kendall, F. & Wickham, G. (1999) *Using Foucault's Method*. London: Sage.

- Matsuda, M., Lawrence, C., Delgado, R. & Crenshaw, K. (1993) *Words that Wound: Critical Race Theory, Assaultive Speech, and the First Amendment*. Boulder: Westview Press.
- Willig, C. (2001) *Introducing Quantitative Research in Psychology: Adventures in Theory and Method*. Buckingham: Open University Press. (C. ウィリッグ著 上淵寿・大家まゆみ・小松孝至訳 (2003) 『心理学のための質的研究法入門—創造的な探求に向けて』 培風館)
- Zarate, G. (2001) *Langues, xénophobie, xénophilie dans une Europe multiculturelle*, Caen: CRDP de Basse-Normandie.

Une analyse des expressions de chauvinisme dans le cyberspace: Déclenchée par un débat sur “300,000 plan des étudiants étrangers” au sein du parlement

YAMAMOTO Saeri

Keywords: Chauvinism, Hate Speech, Cyberspace, Foreign Student, The National Diet

Résumé

Cet article se propose d’analyser de quelle manière un débat parlementaire – au sujet du plan d’accueil de 300 000 étudiants étrangers au Japon – disponible en vidéo sur une plateforme de partage sur Internet, a pu être commenté et interprété par les internautes, puis comment cette discussion a continué de se développer.

Nous montrerons que des commentaires tournent en ridicule certaines parties de l’enregistrement, et que la plupart suivent, mais de manière beaucoup plus crue, une ligne idéologique défendue par l’un des orateurs.

Dans les grandes lignes, la discussion des députés s’articule autour d’arguments économiques et, plus brièvement, de stratégies diplomatiques ; les commentaires des internautes y ajoutent une dimension sécuritaire, se parent parfois de l’injure ou de la grossièreté et prennent dès le début une forte connotation nationaliste. Ces différents argumentaires n’existent pas indépendamment les uns des autres, mais se rejoignent tous autour d’un même discours nationaliste.

(Yamaguchi University, International Student Center)